

明治四（一八七二）年の廃藩置県で地方は大きく変革した。次第に庁舎建築の気運が高まるなか、山口県もまた新しい県庁舎・県議会議事堂を必要とした。時を同じくして、中央では過熱していた国会議事堂の建設計画が頓挫する。今紹介するのは、この二つの出来事に因縁を持ち、その交差点で新時代の建築に挑んだ一人の偉人である。

デザインの妙技で建築・工芸の新時代を切り開いた偉人

武田五一

Gaichi Takeda

「一八七二年～一九三八年」



武田五一は明治5（1872）年、広島県に生まれた。父は書画に造詣が深く、武田は幼少の頃からその薫陶を受けたという。晩年までポケットにスケッチブックを忍ばせていた彼のドローイングに関する素質の原点が、ここにかがわれる。

明治30（1897）年に東京帝国大学工科大学造家学科を卒業した武田はそのまま大学院に進学。2年後には退学するが、在籍中に妻木頼黄や伊東忠太といった建築界の大家を補助し、製図監督としての彼の実力が世に知られ始めた。

その後武田は官命によって渡欧。アール・ヌーヴォーやゼツェッションといった西欧最新の様式に触れた。帰朝後は京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）教授として十余年を過ごし、更に京都帝国大学（現・京都大学）建築学科創設にも尽力。自身も大正9（1920）年から定年まで教授を務め、多くの後進を育てた。こうして生涯の大半を教職に捧げながら、建築から橋梁、街頭装飾まで幅広く設計を手掛け、その時々で教え子に声を掛けては共に仕事をし、活躍の場を用意したという。

なおかつ武田の工芸界への貢献も大きい。農務省（後に商工省）主催の工芸展覧会で審査員を務め続け、そうして中央で工芸の振興に貢献する傍ら、地方産業としての工芸にも注力し、各地の工場を訪れて助言や指導を行ったという。

最晩年には法隆寺国宝保存工事の統率を任せられ、基本方針を取りまとめる。しかしその最中の昭和13（1938）年、法隆寺へ向かう車中で倒れ、世を去った。



国会議事堂は昭和11（1936）年竣工。明治末期に大蔵省臨時建築部長・妻木頼黄主導で設計原案が編まれるも財政難で計画は頓挫。再び動いたのは妻木の没後だった。再始動後の設計には大熊喜邦や武田五一も携わったといわれるが、両名とも、かつては妻木の下で計画中止の無念を味わった臨時建築部の技師であった。



山口県旧県庁舎。庁舎建築史上に類をみない歴史・学術的価値を有するものとして、県議会議事堂とともに昭和59（1984）年に国の重要文化財に指定された。現在は県政資料館として県政や「幻の国会議事堂」などの展示がなされている。

山口県旧県庁舎・県議会議事堂は大正五（一九一六）年に完成した。設計者は妻木頼黄率いる大蔵省臨時建築部。大熊喜邦が構造を、武田五一が意匠を担当した。

中央のエリート集団が地方の建築を引き受けた背景には、「幻の国会議事堂プラン」と呼ばれる、彼らにとつての因縁があった。話は県が依頼を出す明治四十四（一九一）年から五年ほど前に遡る。当時、中央では帝国議会（国会）議事堂の建設計画が議論され、特に熱心だったのが臨時建築部長の妻木だった。武田も同部の技師を兼任しており、妻木は彼に設計図を描かせていたともいわれる。

しかし明治四十四年頃に財政難で計画が頓挫。肝いりの設計案も「幻」となる。そこに舞い込んでき

たのが山口県からの依頼だった。

完成した二つの建物には、夢と消えた議事堂への想いが重ねられていたのだろうか。ルネサンス様式に東洋建築を組み込む発想は、まさしく議事堂原案の通りだ。しかし、この二棟は単なる幻の投影には留まらない。武田らしくゼツェッション風にアレンジされた優美な意匠は、重厚な明治建築とは異なった趣を見せ、人々に新時代の建築を予感させたことだろう。

大正という新時代の意匠を打ち出したこの建築は、山口県政発展の基点となる。更に国会議事堂に通じる背景も相まって、その後の日本建築史にとって重要な史料でもある。現在は国の重要文化財となり、「山口県政資料館」として今日に歴史を伝えている。